

ぼくらは、両りょうめ目がないままどこかで売うられているようだ。いったい、ここはどこなのだろうか？

ぼくらは、少し前まえまでは一つ一つきれいな紙かみに包つつまれて、みんな一緒いっしょに同じ部おな屋やみたいな場所ばしょに入いれられていたようだ。そう、そんな気きがする。

ぼくには、紙かみに包つつまれる前の記ま憶えがない。ないというか、まったく分わからないのである。そう、紙かみに包つつまれた直ちやくご後ごから、少し少すこし何なにかを感じかん始めたはじたのである。そう、何なにか分わからない、初はじめての物ものを感じかん始めたはじたのである。

ところが先ほどから、一つ、二つ、三つと、
ぼくの上や下、右に左にいた友達が部屋から
出されていった。そして、包まれていた紙を
『ビリッ！』と、はがされているようだ。

それからすぐに、ぼくが部屋から出される
番がきた。

『あっ！』と思った瞬間、何かにつかみ上げ
られ、体が『ふわっ！』と浮いた。そして、
ぼくもみんなと同じように、包まれていた紙
を無造作にはがされた。

それからぼくは、はがされた時とは対照的
に、とても丁寧に、そつと棚のような所に置か
れた。どうやら、みんなも、ぼくの周りにい
るようだ。そう感じると、少しではあるがや
んわりと気持ち落ち着いた。

ぼくは、少しでもこの緊張感を和らげよう
と思い、大きなお腹に力をこめて、大きく息
を吸いこんだ。そして今度は大きく息を吐い
た。また吸って、また吐いてと、これらの動作
を五、六度繰り返した。

すると、どうだろう、ぼくの心の目というべきものは分からないが、何かが少しずつではあるが、はっきりと開くのを感じた。しばらくすると、目がないはずのぼくであるが、ぼんやりと、外の様子を感ずることが出来るようになった。

どうやらぼくらは、石畳の通路に面した店で売られているようだ。そして店の中には、ぼくらの仲間が大勢、所狭しと並べられている。

ぼくが並べられている棚は、五段ある棚のうち、ちょうど中段にあたる三段目である。ぼくが置かれてある三段目の棚の上には、ぼくと同じ体の大きさをした仲間が十個ほど並べられている。

また、上の棚にいくほど、ぼくより大きな体をした仲間が並べられており、下の棚にいくほど、ぼくより小さな体をした仲間が並べられている。

さらに一番上の棚には、この店で一番大きな体からだをしていると思おもわれる仲間なかまが一つ、真まん中なかで、みんなを見下みおろすような恰好かっこうで、どつしりと座すわっている。ぼくの十倍じゅうばいくらいのおおきさはありそうだ。

店の前まえでは、この店の主人しゅじんと思おもわれるおじいさんが、ひっきりなしに石畳いしだたみの通路つうろを行いかう無む数の人々ひとびとに向むかって、ひとときわ大きおおな声こえを張はり上あげている。

「ダルマは要いらんかね、ダルマは。ダルマは要いらんかね、ダルマは。」

うちのダルマはそんなじゃそこのダルマとは違ちがうよ。

よく願ねがい事ごとを叶かなえてくれるって、評判ひょうばんの高たかいダルマだ。

嘘うそだと思おもうなら、一度いちど買かって試ためしてごらん。損そんだけは、させないよ」

そうか、ぼくらは「ダルマ」っていうんだな。けれど、ぼくらには、人の願い事を叶えてあげられる力があると言っているが、本当なのだろうか？

どうしてだろうか？ 両目がなく、心の目というか、そんなもので、ぼんやりとした世界だけしか見ることができないぼくらである。

一体どうやったら、人の願い事を叶えてあげられるのだろうか？ 分からない。本当に分からない。

おじいさんのかけ声に何かを感じ、何かに捕まえられたように足を止めた人は、ぼくらのいる店の中に入ってきては、ぼくらの顔を上から下から、右から左から眺めたり、時には体中をさわりながら、一つのダルマを選んでは買っていく。

少ない時には十個程度であるが、多い時には三、四十個ほどの仲間が売られていく。

そしてその都度、いなくなった仲間の代わりに、新しい仲間がやってくる。そこで、分かったこと。ぼくらが棚に並べられる前にいた部屋は、ダンボール箱の中だ。たったんだ。あの箱に詰められて、ぼくらはここまでやってきたんだな。

ぼくが、棚の上に並べられてからちようど、十回目の朝を迎えた夕方に、その少女は、やってきた。

今日は、朝からなんとなく落ち着かなかつた気がする。ぼくの大きなお腹から熱いものがひっきりなしに湧き出てくるのを感じていたからである。

その少女は、いつものおじいさんのかけ声に呼び止められ、ぼくの前に立った。

そして、その少女が、ぼくをじっと見つめると、ぼくは、朝から感じていた以上にお腹が熱くなっているのを感じた。

からだぜんたい
体全体が、よりいつそう紅く紅く染まって
いくのを感じた。こんな体験は、初めてのこ
とである。

ぼくは、少女の大きく黒く澄んだ優しげな
目を受け止めていた。すると、どうであろう、
ぼくの無いはずの両目が、一瞬ではあるが、
その少女の目とあったような気がした。確か
にそう感じたのである。

しかしその時である。少女の後ろにいたお
母さんらしき人が、その少女に向かって声を
かけた。

「どうしたの、早くしなさい！ さっさと行
くわよ。何しているの？」

「わたし、わたしね、とっても、このダルマ
さんが気になるの。分からないけど、とって
も気になるの。不思議な感じがするの」

「ダルマなんて、当たり前じゃないわよ。お母さ
んも二、三度買ったことがあるけど、当たっ
た試しなんか一度もないわよ！」

「でもね、わたし、今度の運動会のこと、お願いしたいの。かけっこでビリにならないようにって。ねえ、いいでしょ」

「じゃあ、小さいのだったらいいわよ」

「あのね、これ、このダルマさんがいいんだけど、これじゃ、ダメ」

少女は、ぼくを手にとりそう言った。

「それより、こっちのダルマの方が、上手にできていると思うけど。どうかしら？」

お母さんが、ぼくの右隣のダルマを手にとつて、そう言った。

「ダメ、ダメだよ。このダルマさんじゃないと、絶対ダメ。このダルマさんが、なんだか気に入ったんだから。ほかのダルマは、考えられない。自分でも、分からないんだけど」

少女は、口をとがらせ、少し頬を赤らめて言った。

「仕方ないわね。じゃあ、そうしなさい」

こうして、ぼくは少女に買われることになったのである。

ぼくは、お店から、その少女の家にたどり着くまでの間ずっと、この少女の温かい何かを感じていた。

売られた時、店の主人であるおじいさんは、当たり前ではあるが、ぼくを白いビニール袋に無造作に、ただ入れた。

しかし、しかしである。その袋を受けとつた少女は、おじいさんとは違って、その袋を無造作にぶら下げることなく、丁寧に大事な宝物を包むように丸め、両手でそつと、お腹のあたりで抱えていてくれていた。一時も、ぶら下げることなく、少女の家に着くまで、ずつと。

ぼくは、少女の家にたどり着くまでの間、ぼくの大きなお腹が今まで以上に熱く熱くなるのを感じていた。またなぜ、こんなに熱くなるのかを疑問に感じ、でもそれを楽しんでいた。

少女とお母さん、それにぼくは、お店から三十分ほどの歩行を楽しみながら、この家族の家に来た。そして少女は、玄関で急いで靴を脱ぐと一目散に二階への階段をかけたのぼり、右手のドアを勢いよく開け放つと、ぼくを急いで袋から取り出しベッドの横にある机の上

に置いた。
少女は、急いでいるわりには動作は丁寧で、ガラス細工を壊さぬような感じで、ぼくを扱ってくれた。

そして少女は、「少しだけ待っててね。手を洗って、うがいでいしてくるからね」と、優しく微笑んで言うのと、ドアを開けたまま、階段を上ってきた時と同じように勢いよく下りて行った。

ぼくは、この少女と出会ってから、以前より周りの様子が見えるようになってきていると感じた。確かに、はっきりしているとは言えないが、さまざまな色も感じるようになってきたのである。

この時ときからぼくは、本ほん当とうに心こころに目めがあるよ
うに思おもえた。

先さきほど部へ屋やを出でて行いった少しょう女じよは、言いったと
おりに、すすぐに戻もどってきた。

つつぎに少しょう女じよは、ぼぼくに対たいして信しんじられない
行こう動どうにでた。机つくえの上うへに置おいてあるペン立たての
中なかから、黒くろいマまジじツつクくを取とり出だすと、ぼぼくの
片かた方ほうの目めに、それそれを突つき立たて、黒くろい瞳ひとみをえがき
ああげた。

その後あと、ぼぼくをそそつと机つくえの上うへに置おくと、両りょう手て
を合あわせて目めを閉とじて、軽かろく会え積しゃくをすすると、
ここうつつぶややいた。

「ダだルるマまささん、今こん度どの運うん動どう会かいのこことでですが、
かかけつつここで、ビびリりにななららないようにしてくだ
ささい。おお願ねがいします。わわたたし、ががんんばばりりまます
かから」

ぼぼくは、少しょう女じよによよつつて片かた方ほうの目めに黒くろい瞳ひとみが
描えがかかれた時とき、その瞬しゆん間かんかから、ははつつききりりと光ひかりを感かん
じじた。

そして今^{いま}までには、ぼやけていて何^{なん}とか判^{はん}別^{べつ}できる程^{ていど}度^どにしか見^みえなかつたものが、はつきりとした色^{いろ}や形^{かたち}に変わ^かった。ぼくは、これまでにはない明^{あか}るい世^せ界^{かい}を感じ^{かん}ると共^{とも}に、ぼくのお腹^{なか}の中^{なか}にあるエネ^エル^ルギ^ギーの鼓^こ動^{どう}と躍^{やく}動^{どう}を感じ^{かん}じた。

ぼくは、このエネ^エル^ルギ^ギーの正^{しょう}体^{たい}が何^{なん}なのかは分^わからないが、ぼくに瞳^{ひとみ}、そして光^{ひかり}を与^{あた}えてくれたこの少^{しょう}女^{じょ}に對^{たい}して、ぼくができる全^{すべ}てのこ^ことを^をしてあげたい気^き持^もちでい^いっ^ぱいにな^なった。

ぼくは、この少^{しょう}女^{じょ}の願^{ねが}い事^{ごと}を聞^きいてからと^というもの、少^{しょう}女^{じょ}に對^{たい}して、「ま^まず、君^{きみ}ができるこ^ことを^を一^{ひと}つ一^{ひと}つ、や^やってい^いく^くんだよ」と、く^くる日^ひもくる日^ひも心^{こころ}の声^{こえ}とい^いうべ^べきものか^かは分^わからないが、精^{せい}い^いっ^ぱい伝^{つた}えようとした。そ^そう、これがぼくにと^とつて、少^{しょう}女^{じょ}に對^{たい}してでき^{でき}ること^{こと}の全^{すべ}て^てだ^だった^たから^らである。

すると少女は、ぼくの思いに応えるかのよ
うに早速、つぎの日の朝から、独りで走りこ
みを開始した。それからというものの、雨の日で
あろうと、筋肉痛で足が痛む時であつても、
どんな状況であろうとも休むことなく朝の
練習を、くる日もくる日も、少女は続けた。

そして運動会の前日の夜、少女は不安げな
顔をしていた。ぼくを抱きかかえながら、何度
も何度も繰り返し、すがるように、こうつぶ
やいた。

「明日はお願いね、明日はお願いします。：
：お願いします」と。

ぼくは少女に対して。「君は、君ができるこ
との全てをやってきたんだよ。自信をもって
いいんだよ。だから、今日は安心して、ゆっ
くりおやすみ。大丈夫、大丈夫だから」と、
これまで少女がやってきたことに対しての、
ねぎらいとエールの言葉を精いっぱい伝えた
つもりである。

そして、ぼく自身も、これまでにない充足感
で満ち溢れていた。

運動会当日の朝、ぼくも少女も、いつもよ
り一時間以上も前に目が覚めた。どうやら
少女は、ぼくを一晩中抱きかかえながら寝て
いたようだ。ぼくはこの時、お互いの気持ち
の全てが伝わったことを確信した。

そして、ぼくは少女にむかって「おはよう、
今日は一生懸命がんばろうね」とだけ伝えた。
ぼくの最後の言葉、気持ち、うまく伝わ
ったのかは分からないが、少女は、ぼくの顔を
じっと見つめながら、にっこり微笑み、つぶ
やいた。

「おはよう、ダルマさん。今まで、ありがと
うね。」

なんだか結果は、まだ分かるわけではない
けど、結果が気にならなくなったの。
じゃあ、ダルマさん、行ってきます」

少女は。そう言い終えると、もう二度と部屋に
戻ることなく、学校へ出かけて行った。
これで、ぼくは少女に、もうどうすることも
できなくなった。はがゆさで胸が張り裂け
そうである。ただただ、少女の帰りを待つこ
とだけ。それしか、今のぼくにはできない。
ダルマにとって、少女が帰宅するまでの
時間は、長いようで、短いような、何とも
不思議な時間だけが過ぎて行くのであった。
そして、傾きかけた夕日が、少女の部屋いっ
ぱいに差し込んで、ぼくの体をよりいっそう
赤く染め上げる頃、少女は帰ってきた。
「ダルマさん、やっぱりダメだった。結果は、
いつもと同じでビリ。ビリだったの。
でも、でもね、ダルマさん、ありがとう。本当
にありがとう。」
なんだか、ビリにはなったんだけど、『やつ
たね』って感じなの。
変だね。本当に変だね。でもね、本当にそ
う思うの」

そう言いって笑わらう少女しょうじよに對たいして、ぼくは自分じぶんの力ちからのなさ、空むなしさ、はがゆさをあらためて実感じっかんした。

けれど少女しょうじよは、ぼくを抱かかえあげると、またしても予期よきせぬ行動こうどうに出でた。

なんと以前いぜん、ぼくの片方かたほうの目めに瞳ひとみを入れてくれた時ときのように、ペン立たてから黒くろいマジックを取とり出だすと、「ありがとう、本ほん当とうにありがとうね：：」と少女しょうじよは繰くり返かえし何なん度どもつぶやきながら、ぼくの、もう片方かたほうの目めに黒くろい瞳ひとみを描かき入いれてくれた。

これでぼくの目めが両目りょうめとなつたわけである。それは片方かたほうの目めであつた時ときよりも、さらにはつきりとした世界せかいを、見みることができるようになつた瞬間しゅんかんでもあつた。

ところが突然とつぜん、ぼくの両目りょうめから、なぜか涙なみだというものがとめどなく溢あふれ出でてくるのであつた。

「ぼくは、一体何のために、この少女と出逢ったのだろうか？」

何をしてあげられたのだろうか？

ぼくだけが、光と温かさを与えてもらったんじゃないだろうか？

いや違う。そうだろうか？

……。

ダルマは自問自答を繰り返すのであった。

そして、深く深い眠りに落ちるかのよう

に、少し少し意識が遠のいていくのを感じていた。

そしてダルマは、両目を『かつ！』と見開

いたまま、もう感じることはなかった。

（両の瞳 完）